NPT 再検討会議　発言原稿

和田　征子

発言の機会を与えて頂き感謝申し上げます。日本被団協の和田征子と申します。私は長崎で１歳 10 ヵ月の時に、爆心地から 2.9Kmの家の中で被爆しました。山で囲まれた長崎の地形で、火傷や外傷はなくこれまで生きることができた一番若い被爆者の一人です。

当時の記憶がない私は、母が折々に繰り返し語る話を聞いて育ちました。
家の窓ガラス、土壁、格子戸など爆風によりすべて粉々になり家の中に 30 センチ位つもったこと。山肌に見たのは、爆心地から火を避け、山を越えて細い山道をよろめきながら、私たちの住む市街地下ってくる光景は遠目には、蟻の行列のような人々の姿。チョコレート色に焼け、つけている衣類もほとんどなく、血で固まった髪の毛が角のような人たちの列でした。臨時の救護所であった専門学校の講堂の床一面に並べられた火傷、怪我の人々の体についた無数の太ったうじ虫。道路に放置されている遺体は荷車に放り投げ回収され、手足が人形のようにとび出して荷台に満載され､家の隣の空き地で、朝から晩まで焼かれたこと。その臭いにも麻痺し、人としての感覚がなくなっていったこと。

人間の尊厳とは何でしょうか。人はゴミのように焼かれるために生まれてきたのではありません。

原爆投下後、アメリカの占領下で、厳しい報道管制が布かれました。それは核兵器がもたらす非人道の結末を隠蔽しました。被爆者は自分たちのからだと心の苦しみ、痛みの原因を知らされることなく、日米政府から 10 年間放置され、沈黙を強いられ隠れるようにして生活しました。何の支援を受けることもなく､原爆投下の年だけで、数字としてだけで残る死者数は、広島で 14 万人、長崎で 7 万人、その多くは老人、女性、子どもを含む非戦闘員でした。その後も死者数は増え続けています。

そして今日まで、かろうじて生きながらえてきた被爆者は平均年齢８４歳となりました。その苦しみ、それは深く、今なお続くものです。愛する者の死、生き残ったという罪悪感、脳裏に焼き付いたままの光景、音、匂い、原因のわからない病気、生活苦、世間の偏見、差別、諦めた多くの夢。それは人種、国籍、年齢、性別を問わず、きのこ雲の下にいた者に被爆者として死に、また生きることを強いるものでした。当時胎児であった者たちにも、さらに被爆者の子どもたちにも、今なお、身体に心にその影響は及んでいます。

1956 年の被爆者唯一の全国組織である日本被団協結成から 66 年間、被爆者は「自

分たちの体験をとおして、自らを救うと共に、人類の危機を救おう」との決意を誓い合い、核兵器のない世界を願い、世界中で被爆の実相を語り核保有国政府にも訴え、忍耐強く歩んできました。「いかなる条件の下でも」、この「非人道兵器」は使われてはならない。被爆者の切なる願いです。

日本被団協は 2005 年から、NPT 再検討会議に合わせて国連本部訪問者ロビーで原爆展を開いてきました。今、4 回目の展示を行なっていますので、ぜひ見てください。

原爆をつくった者がいる、それを使った者がいる、そしてその威力や結果を喜んだ者がいる。許せない思いがありました。しかし被爆者はそれに対して報復を願ったことはありません。仮にも核兵器が意図的であれ偶発的であれ三度使われることになれば、その結果を喜んで見届ける者は、もはやいない、と被爆者は知っているからです。すべてがなくなった原子野で、国力や地位や名誉を誰が誇ることができるのでしょうか。抑止のためで、使わないと言いながら作り続ける核兵器は、人類の負の遺産に他なりません。核兵器による力は正義ではありません。

半世紀も前に発効した NPT が核兵器国によってほとんど履行されないことで、非核国が意を決して TPNW ができました。核保有国とその同盟国は、その不誠実さの代償として、いかに今、核戦争発生の淵に人類を連れてきたかを認識すべきです。どれだけ多くの政治を司る皆さんが被爆者に会い、証言を聞いてきたでしょうか。核兵器使用の結末を知ってください。この会議において 2010 年に再確認された「明確な約束」について誠実な議論と改めての決意がなされますよう、各国代表の皆さまの良識と英知に心から訴えます。

ありがとうございました。